

共生社会の形成に向けた附属特別支援学校の挑戦 2

今日的な教育課題への取り組み

企画者	渡部匡隆（横浜国立大学教育人間科学部） 柘植雅義（筑波大学人間系） 霜田浩信（群馬大学教育学部）
司会者	渡部匡隆（横浜国立大学教育人間科学部）
話題提供者	土屋和彦（北海道教育大学附属特別支援学校） 滝澤 健（香川大学教育学部附属特別支援学校） 三澤哲彦・早川愛美（群馬大学教育学部附属特別支援学校）
指定討論者	明官 茂（国立特別支援教育総合研究所）

KEY WORDS: 共生社会 知的障害 附属特別支援学校

【企画趣旨】

附属特別支援学校は、大学学生の教育実習の受け入れのみならず、都道府県の教員研修の中核機関や今日的な教育課題に対する研究開発校としての役割があり、共生社会の形成に向けた取り組みをはじめとして、特別支援教育における今日的な教育課題においても地域のモデルとなるような先導的な取組が期待されている。しかしながら、それらに取り組んでいくためには、附属特別支援学校として解決すべき課題も多いと考える。

そこで本シンポジウムでは、共生社会の形成に向けた教育実践、新学習指導要領に基づく教育実践などの今日的な教育課題へ先導的に取り組んでいる附属特別支援学校に実践を話題提供いただき、実践での工夫やそこでの課題について共通理解を図るとともに、今後の取組方について議論することをねらいとする。

【話題提供者の趣旨】

福祉事業所と協働した障害者アート活動を支援する取り組み-心が動く障害者アートで共生社会の実現を目指す-【土屋和彦】

2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会を見据え、障害者のアート活動が注目を浴びている。

道南の福祉事業所では、利用者の高齢化や障害の程度の重度化が課題となっており、作業の出来高だけではない利用者の良さを引き出そうと障害者アートに注目していた。

そこで、共生社会の実現を目指し、障害者アート活動を通して、その作品が人々の感動をよび、作品や作者を高く評価することで、障害者が自尊心を持ちながら生きていくことができる支援を、附属特別支援学校として地域の福祉事業所と協働しネットワークを形成して行いたいと考えた。

第一歩として、昨年度、北海道アールブリュットネットワーク協議会の協力を得て、函館市と近郊にある12箇所の福祉事業所と障害者アートをテーマに6回の合同研修会を開催し、函館市芸術ホールで展示会を実施するに至った。

この実践から、附属特別支援学校として共生社会の実現を目指し、障害者アート活動を進める意義や地域に貢献できる可能性について話題を提供する。

知的障害特別支援学校における協働的な学びを支援する授業づくり【滝澤 健】

新学習指導要領では、「育成を目指す資質・能力」を育むため、児童生徒の主体的・協働的な学びを視点とした授業改善が課題とされている。知的障害特別支援学校においては、協働に関する児童生徒の実態が多様であり、実態差も大きいので、個別指導に重点が置かれやすく、児童生徒の学び合いを成立させるための指導者側のノウハウが十分で

はない。このような背景の中、本校では、児童生徒の自立と社会参加を目指して、「児童生徒がわかって動いて学び合う授業づくり」に取り組んできた。目指すべき児童生徒の具体的姿を共通理解し、その実現に向けた支援方法を24項目で構成される「授業デザインの羅針盤」にまとめ、授業評価や支援改善の手掛かりにしている。しかしながら、協働に関して、児童生徒の役割活動ややり取りが形式的なものになりやすいことや、協働場面の設定自体が目的化してしまう傾向が見られた。そこで、28年度からは、児童生徒の協働的な学びに焦点を当て、目標設定や児童生徒の学習評価の視点を授業づくりに取り入れ、支援改善の質の向上を目指している。

教科学習における交流及び共同学習の展開【三澤哲彦・早川愛美】

共生社会の形成に向け、交流及び共同学習を一層推進することが求められている。しかしながら、交流と共同学習の2つの側面を一体として捉えて推進するという、交流及び共同学習の目的に迫ることには未だ課題がある。

本校では、校舎を共有する附属小学校との日常的な交流や定期的な行事交流を基盤とし、学年や学部との進行に伴い、居住地域の学校や本校近隣の公立学校、周辺地域へと児童生徒の学びの場を拡げてきた。特に近年は、附属小学校と連携し、交流とともに共同学習の側面の充実を目指し、実態や学ぶ内容が異なっても、1つの学習集団としてかかわり合いながら共に学ぶ単元を構想、実施してきた。実践をとおして、教科学習における交流及び共同学習の授業づくりの過程を見出すとともに、両校児童が確かな学びを得るために、観点別評価を授業構想から改善までに効果的に位置付けることができつつある。本提案では、本校と附属小学校の児童がかかわり合いながら国語科や図画工作科等のねらいに迫った実践と、両校の児童や教師、保護者に見えた変容等について報告する。

【指定討論者の趣旨】【明官 茂】

附属特別支援学校の役割は、これからの教育課題を捉え、それを解決するために研究開発し発信することが重要と考える。また、それぞれの地域の実情に応じた取り組みも重要である。各学校が附属特別支援学校の利点をどう活用しているか、大学や県教委、地域の学校とどのように連携しているか、学校としてどのようなビジョンを持ち、人材育成や組織改革を進めながら実践を工夫している点を明らかにしたい。

(WATANABE Masataka, TSUGE Masayoshi, SHIMODA Hironobu, TSUCHIYA Kazuhiko, TAKIZAWA Ken, MISAWA Tetsuhiko, HAYAKAWA Megumi, MEIKAN Shigeru)